

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：32643

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26570026

研究課題名（和文）反転授業を用いた観光学の発展に関する研究 自然科学の包含を題材として

研究課題名（英文）The research on the development of tourism studies using flipped classroom

研究代表者

有馬 貴之（Arima, Takayuki）

帝京大学・経済学部・講師

研究者番号：00610966

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、観光学に自然科学の知見や視点を包含していくことを念頭に、大学における観光教育の方法論を検討、開発、実施した。3年間の研究の末、観光学と自然科学の学問分野の整理、反転授業の実施と効果の測定、現場教育に対する活用可能性の検討、アウトリーチ活動のそれぞれにおいて成果を得た。本研究の結果、観光学における自然科学的知見や視点的の包含に一步前進することができ、研究課題や活動についての示唆も得られた。総じて、今後の研究の基盤となる成果を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This research considered the methodology of tourism education at university with the aim of incorporating natural science knowledge and perspective into tourism studies. After three years of research, it was able to be organizing several academic fields of natural sciences in tourism studies, conducting lessons of flipped classroom and measuring the effect of them, utilizing on-site training in tourism education and activities. This research also obtained the proposals for the future researches and activities.

研究分野：観光地理学

キーワード：観光学 反転授業 ICT教育 観光地理 観光教育 地理学 スマートフォン 予習動画

1. 研究開始当初の背景

日本の観光学は心理学や人類学、社会学や経営学などの文系領域の研究者達の研究成果によって支えられてきた。観光現象自体が人文現象であることから、これまでの観光学における学問的背景は不思議なことではない。

しかしながら、観光研究の発展に伴い、観光資源に対する研究やその学問的視点の必要性が問われるようになってきた。例えば、自然観光地において、観光現象が自然環境に与える影響などは、文系領域に加え、自然科学などの理系領域の視点も必要となってくる。しかし、現在の日本における観光学や観光研究において自然科学領域の研究は少ない。その一要因には大学等の高等教育機関で、自然科学と観光学との関係性がほとんど教授されないことがあげられる。

2. 研究の目的

本研究では、観光学に自然科学の知見や視点を包含していくことを念頭に入れ、大学における観光教育の方法論を検討、開発、実施していくことを目的とする。

主な方法論としては近年注目される反転授業のスタイルを導入する。近年、アクティブ・ラーニングの一手段として反転授業が大学でも行われるようになった。ただし、それらは医学や数学などの理系科目に多く、文系科目への導入は遅れている。観光学においても反転授業の導入例はない。

本研究では、観光学の分野（地理学、観光地理）に従来の一方向型講義ではなく、反転授業化した講義を取り入れ、そこに自然科学の知見を入れ込んでいく。

3. 研究の方法

(1) 観光学に寄与する自然科学分野の整理

本研究では、初めに観光学に寄与する自然科学の分野にはどのような学問があるのかを整理する。たとえば、観光学に対して貢献をしてきた分野である地理学は文系にも理系にも捉えられる学問であるが、より自然科学に近い学問分野もあると考えられる。

そこで、自然科学の各研究者に観光学とのつながりについて、分担して執筆してもらい、観光学に寄与する自然科学分野を整理する。このことで観光学と自然科学のつながりの基盤を作る。

(2) 反転授業の教材開発と授業の実施・評価

本研究の中心的な内容は、反転授業を用いて観光学の新たな側面を大学生に教授することである。そこで、本研究では東京交通短大の観光地理の講義を反転授業化し、その評価を行う。反転授業の教材として、前年度まで行っていた講義のスライドを編集、加工し、予習教材（動画）を作成する。それらをスマートフォンで視聴できるように、講義の当日は簡単な小テストと演習形式の授業を行う

こととした。

観光地理の講義は日本各地の観光地や観光資源を記憶する内容であるが、この内容はいわゆる典型的な一方向型の授業になりやすい性質を持つ。そのため、内容を反転させ、能動的に楽しく学んでもらうことで、観光学における地理学や自然科学の意義について認識してもらおうという取り組みである。

(3) 観光学と自然科学の現場教育への援用

観光教育においては現場教育も重要である。したがって、大学における観光教育の一環として、自然科学的知見と観光的知見の双方を学ぶことのできる実習プログラムを開発し、実施、評価する。その舞台は地球科学的知見を観光に活用しようとしている箱根ジオパークとした。

(4) 観光学と自然科学の関係性周知に向けたアウトリーチ活動

観光学に自然科学の視点を包含していくためには、それらの関係性を広く社会に周知していく必要がある。そこで、巡検などの野外発表を研究者向けに行い、観光学と自然科学の関係性を理解してもらおう。また、より広く社会に伝えるため、観光関連の書籍に自然科学の知見を含めていくことを実施する。

4. 研究成果

(1) 観光学に寄与する自然科学分野の整理

観光学における自然科学の立ち位置を考察し、自然を対象とするツーリズム（自然ツーリズム）に関わる研究の寄与の方向性として、以下の3つにまとめた。

まず、自然やその仕組みを理解するための基礎的な知識としての自然科学である。具体的には地理学や生態学、土壌学、そして工学分野である情報学から自然ツーリズムへの寄与を検討した。例えば、地理学では空間の理解が促され、自然環境そのものの理解には生態学や土壌学の知見が、情報学では適切な伝達手法についての知見を得ることができると。

次に、エコツーリズムやジオツーリズムなどの自然ツーリズムの形態理解に対しても自然科学的知見が活用でき、実際に生じている観光現象を理解する視点を提供できることが明らかとなった。

第三に、持続的発展を含めた今後の自然ツーリズムへの指針を提供するという点においても自然科学的知見の有用性がみられた。以上のように、観光学における自然科学の有用性と分野の整理を行った。

(2) 反転授業の教材開発と授業の実施・評価

本研究で行った反転授業では演習内で調べ物をする必要がある。そのため、学生はスマートフォンなどの電子機器やガイドブックなどを持ち込みながら、グループ内で活発に議論していた。また、演習内容はツアーの

作成であったため、それを時間内に完結させるという作業効率が回を重ねるにつれて向上した。

一般に反転授業では20名～30名の規模が適切とされるが、本研究で対象としたのは80名程度のクラスであった。一般に受講者が多くなると、予習動画の視聴率は減少するが、今回の講義ではかねがね85%以上を推移した。これはスマートフォンなどの手軽な電子媒体で予習動画を視聴できた影響と考えられた。

授業評価の一つとして予習時間をみると、多くの学生は30分未満の予習を行っていた。これは期待されていた時間よりも少ない時間であった。この要因としては予習が動画の視聴を中心としたものであったため、予習の段階では能動的な学びとはならず、より時間を費やす受動的な学びにはならなかったことがあげられる。

学生の意識面に関して考察すると、最も評価された項目は授業自体の楽しさであった。つまり、反転授業やグループワークといった能動的な形態が学びの楽しさを生んだと考えられる。また、内容の理解や興味に対しても評価は高かった。なお、予習動画には一部自然科学的な視点も入れており、そのような視点もある程度は楽しんで学んだと推察されるが、その知識の獲得については試験等での評価などで改めて評価を行う必要がある。

反転授業に関する課題としては、わかりやすさの点で評価が低くなった点があげられる。これは学生が一方向型の講義に慣れており、能動的な学習に戸惑いを生じたことが影響していると考えられる。また、今後の勉強をより進めていくという意識についても十分に醸成できなかった。これらの点は今回の大きな課題であり、観光学の発展や自然科学の包含についても、看過できない課題であった。観光教育の方向性やより良い教授法を検討し、進展させていく必要があるといえる。

総じて、反転授業を実施することによって、学生に観光学の知識を楽しく学んでもらう効果が得られたといえる。演習でも学生が主体的、能動的に学ぶ姿勢がみられた。しかしながら、それらを学生が全面的に受け入れたかといえば、一部には好意的に受け入れられない学生も存在していた。これは能動的な学習自体に不慣れな学生も多く、戸惑いを感じたためとも考えられる。そのため、より複雑な知見、また自然科学的な知見やその視点を取り入れるためには、今後もより進展した授業手法の開発が必要である。

(3) 観光学と自然科学の現場教育への援用

箱根ジオパークにおける学習プログラムを開発、実施した結果、以下の成果が表れた。観光学を専門とする学生に対しても箱根ジオパークにおいて教育を行うことで、地形学や地質学、および地理学の重要性への気づきが芽生えた。より具体的には、学生は地域を

説明する地球科学的な資源と観光資源の関連性を理解したと考えられる。また、実際にツアーを企画し、催行していくなかで、現地に足を運び、自然環境などを学んでいくことで学生の自然科学的視点も養われたものと考えられる。なお、観光学に関連したものでいえば、ツアーを催行するまでの一連の過程においてコミュニケーションの活用法や、地元業者への交渉手順なども学びの対象となった。

ジオパークにおける観光教育は海外でも実施されている。地域振興に重きがおかれた日本のジオパークでは、地学や地理学だけではなく、観光学を実践的に学ぶ場としての活用も望まれる。そのためには、今後の課題として、観光学におけるジオパーク研究の進展と、ジオパークにおける観光教育のさらなる事例報告も必要となってくるといえる。

(4) 観光学と自然科学の関係性改善に向けたアウトリーチ活動

本研究では日本地理学会の学術大会において栗駒山麓ジオパークでの巡検を企画した。栗駒山麓ジオパークは、「自然災害との共生と豊穡の大地の物語」をテーマに、奥羽山脈の一部をなす火山である栗駒山(1,626m)と、2008年の岩手・宮城内陸地震で発生した山麓の崩壊群の地形や景観を防災教育や研究、観光などに活用し、持続可能な地域づくりを行っている。巡検では、栗駒山麓ジオパークの山岳から丘陵部、平野、低湿地という多様な環境を現地のガイドと共に巡りながら、地震による巨大地すべり地形の形成プロセスや防災教育のあり方、栗原市の豊かな耕土と水との関わり、ラムサール条約の締結地でもある伊豆沼の環境保全などの自然科学的な知見を観光で活用している事例について伝達した。

また、東京観光財団の発行する東京シティガイド検定用の教科書において、多摩地域と伊豆諸島を対象として、地誌学的見地からの紹介を行った。地誌学は自然環境と人々の暮らしの関係性を示唆する視点を持ち、観光学における観光資源論を下支えする学問領域でもある。東京を観光する、もしくは案内する人々が学ぶ教科書に、これらの視点を取り入れることで、視点の周知につながったといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

有馬貴之・青山朋史・山口珠美 2016. 箱根ジオパークと観光教育 帝京大学の演習授業にみる教育効果とその要因. 地学雑誌 125:871-891. 査読有, DOI: <http://doi.org/10.5026/jgeography.125.871>

有馬貴之 2016 . 特集号「ジオパークの教育力 教育から学習へ」巻頭言 . 地学雑誌 125: 779-783, 査読無 , DOI: <http://doi.org/10.5026/jgeography.125.779>

ARIMA, T. 2016. The Educational Capabilities of Geoparks : From Education to Learning. Overview: The Educational Capabilities of Geoparks: From Education to Learning. 地学雑誌 125:775-778, 査読無

宮原育子・菊地俊夫・有馬貴之 2016 . 巡検第1班 栗駒山麓ジオパーク , E-journal GEO 11: 570-572 . 査読無 , DOI: <http://doi.org/10.4157/ejgeo.11.570>

有馬貴之・加藤 大 2015 . 観光教育における反転授業の導入-「観光地理」の講義を題材に . 日本観光研究学会全国大会学術論文集 , 30:181-184 . 査読無

有馬貴之 2015 . 地理的分布にみる日本のジオパーク . 歴史と地理 688:25-32 . 査読無

有馬貴之 2015 . 旅行ガイドブックにみる富士山観光のイメージ変化-『るるぶ富士山』の目次を対象としたテキスト分析 . 地学雑誌 124:1033-1045 . 査読有 , DOI: <http://doi.org/10.5026/jgeography.124.1033>

〔学会発表〕(計 2 件)

宮城豊彦・宮原育子・菊池俊夫・有馬貴之 . 「栗駒山麓ジオパーク」自然災害との共生と豊穡の大地の物語を巡る(巡検案内). 日本地理学会秋季学術大会 . 2016 年 10 月 2 日 , 栗駒山麓ジオパーク(宮城県・栗原市)
有馬貴之 . 観光教育における反転授業の導入-「観光地理」の講義を題材に . 日本観光研究学会第 30 回全国大会 . 2015 年 11 月 29 日 , 高崎経済大学(群馬県・高崎市)

〔図書〕(計 3 件)

東京観光財団(有馬貴之ほか 12 名), 東京観光財団『東京まち歩きブック』2017 年 , pp193

原 真志ほか 7 名(6 番目), ナカニシヤ出版, 『コンテンツと地域-映画・テレビ・アニメ(シリーズ・21 世紀の地域)』2015 年 , pp198

菊地俊夫・有馬貴之, 朝倉書店, 『よくわかる観光学シリーズ 3 自然ツーリズム学』, 2015 年 , pp175

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

帝京大学 ウェブサイト
<https://www.e-campus.gr.jp/staffinfo/public/staff/detail/2358/19>

反転授業 教材(予習動画) 視聴サイト
YouTube(限定公開のため, アドレスは非公開)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

有馬 貴之 (ARIMA, Takayuki)
帝京大学・経済学部・講師
研究者番号 : 00610966

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

加藤 大 (KATO, Dai)
青山 朋文 (AOYMA, Tomofumi)
山口 珠美 (YAMAGUCHI, Tamami)